

病害虫発生予察情報(9月予報)

令和5年8月30日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	いもち病 (穂いもち)	発生量：並 (発病株率 1.3%)	8月の葉いもち発生量：並(±) 8月の穂いもち発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：並か多い(+)
	紋枯病	発生量：やや多 (発病株率 11.1%)	8月発生量：やや少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並か多い(+)
	トビイロウンカ	発生量：並 (寄生数 0.7頭/株)	8月発生量：少(発生なし)(-) 8月の成虫誘殺数：少(誘殺なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並か多い(±)
	斑点米カメムシ類	発生量：並	8月発生量：やや少(-) 8月の成虫誘殺数：並～やや少(±～-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並か多い(±)
温州みかん	黒点病	発生量：多 (発病度 0.9)	8月中下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：並か多い(+)
	ミカンハダニ	発生量：やや多 (寄生葉率 2.5%)	8月中下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：並か多い(-)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや少 (寄生果率 0.1%)	8月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並か多い(±)
中晩柑類	かいよう病	発生量：やや多 (発病度(果) 0.4)	8月中下旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：並か多い(+)
かき	ハマキムシ類	発生量：やや少	8月中旬発生量：少(-) 7.10モントラップ [®] 誘殺数：少～多(-～+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並か多い(±)

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
果樹全般	カメムシ類	飛来数：並	8月上中旬誘殺数：少～やや多（－～＋） ヒノキ・スギ球果着果量：やや少（－） ヒノキ・スギ球果寄生数：やや少（－） ヒノキ球果吸汁痕数：やや少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並か多い（±）
茶	炭疽病	発生量：並 (病葉数 28.3 葉/1.25m ²)	8月中下旬発生量：やや少（－） 気象予報：気温：高い（±） 降水量：並か多い（＋）
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (叩き落とし虫数 4.9 頭/4 力所)	8月中下旬発生量：やや少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並か多い（±）
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	発生量：並 (叩き落とし虫数 1.0 頭/4 力所)	8月中下旬発生量：やや少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並か多い（±）
	チャノホソガ	発生量：少 (巻葉数 1.2 葉/1.25 m ²)	8月中下旬発生量：少（－） 8月の成虫誘殺数：並～少（±～－） 気象予報：気温：高い（±） 降水量：並か多い（±）
	ヨモギエダシャク	発生量：やや少 (叩き落とし虫数 0.12 頭/4 力所)	8月中下旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並か多い（±）
	カンザワハダニ	発生量：多 (寄生葉率 3.0%)	8月中下旬発生量：多（＋） 防除員からの報告：やや多～多（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並か多い（±）
	クワシロ カイガラムシ	発生量：やや多 (寄生株率 1.3%) 発生時期：早い	8月中下旬発生量：やや多（＋） 気象予報：気温：高い（±） 降水量：並か多い（±）
ねぎ (白ねぎ)	疫病	発生量：やや少 (発病株率1.1%)	8月下旬発生量：少(発生なし)（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並か多い（＋）
	黒斑病・葉枯病	発生量：やや少 (発病株率4.7%)	8月下旬発生量：少(発生なし)（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並か多い（＋）
	シロイチモジヨトウ	発生量：並 (寄生株率1.6%)	8月下旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並か多い（±）
	ネギハモグリバエ	発生量：やや少 (寄生株率 45.4%)	8月下旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並か多い（±）
	ネギアザミウマ	発生量：並 (寄生株率 14.6%)	8月下旬発生量：少（－） 防除員からの報告：やや多（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：並か多い（±）

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
いちご	炭疽病	発生量：やや少 (10月発病株率1.7%)	8月上旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
	うどんこ病	発生量：少 (10月発病株率1.5%)	8月上旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：並か多い (±)
	ハダニ類	発生量：並 (10月寄生株率12.5%)	8月上旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (－)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多 (10月寄生株率0.4%)	8月上旬発生量：やや多 (＋) 8月上中旬誘殺数：並～やや少(±～－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (－)
作物全般	オオタバコガ	発生量：やや多	フェロモン誘殺数：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、記述がある場合は時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のごく過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(＋)、少発要因の場合は(－)を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索！



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<https://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【稲】

＜生育の概況等＞

巡回時の生育は早期栽培が乳熟期～成熟期、普通期栽培が幼穂形成期～糊熟期であった（調査期間：8月10日～22日）。病虫害防除員からのアンケート調査によれば、生育は概ね平年よりやや早い傾向。

●いもち病（穂いもち）

予報の根拠

- ・8月の巡回調査では、県全体の葉いもちの平均発病株率は2.2%（平年2.4%）と平年並であった。
- ・8月の巡回調査では、穂いもちの発病は確認されなかった（平年0.3%）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（感染好適条件：気温15～25℃、葉面湿潤時間10時間以上、前5日間の平均気温が20～25℃を全て満たす時）。

防除対策

- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した雲雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・現在、上位葉に発生している葉いもちは、穂いもちの発生を助長する。そのため、葉いもちが多発しているほ場では、穂いもちの防除を適期（穂ばらみ期～穂揃期）に2回行う。
- ・さらに多発が予想される場合は傾穂期に追加防除を行う。
- ・常発地では適期に薬剤の予防散布を行う。
- ・本県ではMBI-D剤耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県ではQoI剤耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（<https://www.taiseikin.jp/guidelines/>）を参照。

●紋枯病

予報の根拠

- ・8月の巡回調査では、平均発病株率は5.4%（平年7.2%）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する（本病は生育適温28～32℃と高温を好む）。

防除対策

- ・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生がみられたほ場では発生しやすい。そのようなほ場では発生に注意し、発生が見られた場合は速やかに薬剤防除を行う。
- ・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため、そのようなほ場では今後の発生に注意する。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年0.05頭/株）。
- ・ 県内4ヶ所の予察灯では、8月は第4半旬まで誘殺が確認されておらず、平年より少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 9月の気温が高い場合には急増することがあるので注意する。葉色に注意し、水田内で坪状に葉が黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等）

予報の根拠

- ・ 8月の水田におけるすくい取り調査では、34%の水田（平年33%）からアカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ等が捕獲され、平均捕獲数は1.0頭/30回振り（平年1.5頭）と平年よりやや少なかった。
- ・ 8月第3または4半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ及びミナミアオカメムシの誘殺数は平年並～やや少なく推移している。ただし8月第1半旬までは誘殺数は多かった。
- ・ 病害虫防除員のアンケート調査結果によると、一部地域では発生がやや多い。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。穂揃期（すべての茎のうち80%の茎で穂が出た状態）とその7～10日後の2回薬剤散布を行うと効果が高い。また、イネカメムシの発生が目立つ場合は出穂期（すべての茎のうち50%前後の茎で穂が出た状態）に散布する。
- ・ 農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稻のカメムシを防除する時期に多く、水稻のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報交換を図る等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は農林水産省ホームページ（https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_mitubati/honeybee_survey.html）を参照する。

【温州みかん】

<生育の概況等>

生育は数日早い産地が多く、果実の肥大は平年並～やや良い。

●黒点病

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、平均発病度は1.4（平年0.8）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 防除実施以降の累積降雨量が250mm～300mmに達した時点、または防除実施日から25～30日経過が次の防除実施の目安となる。アメダスの気象データなどから栽培地域での累積降雨量を確認し防除を実施すること。
- ・ 近年は多発生年が連続しており、本年も平年より発病は多い。ただし、微細な病斑で留まっている様相なので、防除を徹底し病徴の進展を防ぐこと。
- ・ 9月以降の後期感染を防止するため、台風の前など、適宜防除を実施する。ただし、早生品種の防除は収穫前日数に注意して行うこと。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、平均寄生葉率は13.5%（平年4.6%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並か多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 着色期以降に発生すると果実が着色不良となり商品価値が低下するため、発生がみられた場合は薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年平均寄生果率0.06%）。果梗部被害度は0（平年1.3）、果頂部被害度は0.01（平年0.13）と、いずれも平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ アメダスの気象データを用いた予測では、第6世代成虫の発生ピークは8月15日～9月3日（既にピークを迎えた産地もある）、第7世代成虫の発生ピークは9月1～26日と予想される（発生ピーク時期は地域によって異なる）。なお、各地域における発生時期予測の詳細については静岡県病害虫防除所ホームページを参照する。
- ・ 薬剤防除適期は各世代の発生ピーク7日前～当日である。
- ・ 普通温州園では寄生果率10%を目安に防除を行う。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、果実の平均発病度は1.04（平年0.33）と平年よりやや多かった。葉の発病度は0.11（平年0.37）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病は雨媒伝染し植物体の傷口から感染するため、台風などの強風を伴う降雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。台風の接近が増える時期となるため、気象情報とは場の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防的な防除に重点を置く。
- ・ ミカンハモグリガの加害による傷は、感染を著しく助長するため防除する。
- ・ 夏秋枝は罹病しやすく伝染源となるので、本病が多発している圃場では夏秋枝を切除する。

【かき】

<生育の概況等>

生育は平年並～やや早く、果実の肥大は平年並である。

●ハマキムシ類

予報の根拠

- ・ 8月中旬の巡回調査では平均被害葉率は0.1%（平年0.5%）と平年より少なかった。
- ・ 浜松市内のフェロモントラップにおける7月以降の誘殺数は、チャハマキが平年より少なく、チャノコカクモンハマキは平年並～多く推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 地域の予察灯やフェロモントラップの調査を参考に、適期防除（成虫発生盛期の7～10日後）に努める。
なお、本虫の誘殺データは、静岡県病虫害防除所ホームページを参照する。

<その他の病虫害>

●フジヨナカイガラムシ

- ・ 8月中旬の巡回調査では、本種の寄生は認められなかった（平年平均寄生果率1.1%）。
- ・ 本種は果実とへたの間に寄生しており薬剤が届きにくいいため、丁寧に散布を行う。なお、本種の発生時期予測は、静岡県病虫害防除所ホームページを参照する。

【果樹全般】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・ 県内6か所のフェロモントラップにおける8月上中旬の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが6.9頭/か所（平成144頭）、ツヤアオカメムシが0.2頭/か所（平成6.9頭）であり、両種とも平成より少なかった。同様に、カメムシ類は7.2頭/か所（平成152頭/か所）と平成より少なかった。
- ・ 県内4か所の予察灯における8月上中旬の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが390頭/か所（平成330頭/か所）、ツヤアオカメムシが81.0頭/か所（平成62.0頭/か所）、クサギカメムシが134頭/か所（平成111頭/か所）であり、いずれも平成よりやや多かった。
- ・ 繁殖場所であるヒノキ・スギ球果の着果量（結果量指数）は、県平均3.3（平成4.7）と平成よりやや少なかった。
- ・ ヒノキ・スギ球果におけるカメムシ類の平均寄生数は、10結果枝あたり1.7頭（平成3.1頭）と平成よりやや少なかった。
- ・ 8月中下旬のヒノキ球果における球果1個あたりのカメムシ類の吸汁痕数は、平均7.5（平成10.1）と平成よりやや少なかった。なお、ヒノキ球果における吸汁痕数が25を超えると、カメムシ類はヒノキから離脱し、餌を求めて果樹園に飛来する。
- ・ 以上をまとめると、フェロモントラップへの誘殺数は少なく、予察灯への誘殺数はやや多く、ヒノキ・スギ球果の着果量はやや少なく、球果における寄生数及び吸汁痕数はいずれもやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平成並か多いが、気温は高いため、本種の発生をやや助長する。
- ・ 1か月予報を加味すると、9月の果樹園への成虫飛来数は平成並と予想される。

防除対策

- ・ フェロモントラップ及び予察灯における誘殺数は、静岡県病虫害防除所ホームページを参照する。
- ・ ヒノキ・スギ林付近の果樹園では多発しやすいため、ほ場での発生状況をよく観察し、発生が見られたら防除を行う。
- ・ 8月中旬以降、磐田市や浜松市における予察灯への誘殺数が増加しており、場所によっては果樹園への飛来も早まる可能性があるため注意する。

【茶】

<生育の概況等>

秋芽の生育は萌芽前の地域が多いが、茶園の管理によりばらつきがある。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、平均発病葉数は17.6葉/1.25㎡（平成22.8葉/1.25㎡）と平成よりもやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平成よりも高いが、降水量は平成並か多いため、本病の発生をやや助長する（分生子の発芽適温 22～27℃）。

防除対策

- ・本病の感染には、新芽生育期に降雨による胞子の飛散と10時間以上の葉の濡れが必要であり、本病の潜伏期間はおよそ20日と長い。秋芽生育初期に半日以上続く降雨があった場合には、早め（萌芽期～2葉期）に防除を行う。秋冬番茶を摘採する茶園で伝染源が多いほ場では、速やかに感染後の有効期間が長い浸透性殺菌剤を散布する。一方、生育中期以降に降雨があった場合は、たとえ感染しても秋冬番茶の摘採や、秋の整枝作業で、新芽の上部は症状が出る前に刈られるので、防除の必要はない。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・8月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は8.3頭/4カ所（平年11.0頭/4カ所）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、発生状況を確認し、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・8月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.8頭/4カ所（平年1.0頭/4カ所）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、発生状況を確認し、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・8月中下旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.3葉/1.25㎡（平年1.1葉/1.25㎡）と平年より少なかった。
- ・フェロモントラップによる誘殺数は、平年並～少なく推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。
- ・地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、秋冬番茶を摘採する茶園では適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページで提供している。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・8月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.04頭/4カ所（平年0.08頭/4カ所）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・平年は9月に幼虫の発生が見られる。茶園内で局所的に発生するので茶園をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、樹冠面の平均寄生葉率は10.3%（平年2.3%）と平年より多かった。また、報告のあった防除員12名中10名が、多あるいはやや多の回答だった。
- ・ 気象の1か月予報は、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高い。茶園が乾燥すると天敵のカブリダニ類の増殖が抑制され、本種の発生が助長される恐れがある。

防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園や、発生の認められている茶園では、天敵への影響が少ない薬剤を選択し、直ちに防除を行う。
- ・ 降雨が少ない場合は急激に増殖する恐れがある。茶園の発生に注意し、早期に防除を実施する。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.8%（平年5.6%）と平年よりやや多かった。
- ・ アメダスの気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第3世代予想ふ化最盛日は、8月30日の計算によると平年より6日早い9月7日と予想される。

防除対策

- ・ 地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察し、適期防除を行う。アメダス地点の予想ふ化最盛日については静岡県病虫害防除所ホームページで提供している。なお、7月に防除した茶園では、系統の異なる薬剤を使用して防除する。

<その他の病虫害>

●褐色円星病

- ・ 本病は、春先になって落葉が始まってからの防除では効果がない。一番茶摘採期に発生の多かった茶園や二番茶残葉に緑斑症状が多数見られる茶園では、秋芽の生育期～硬化期に必ず1～2回防除する。

●赤焼病

- ・ つゆひかり等の感受性品種では、春先に発病して枯死した枝や茎葉内に病原細菌が残存して越冬している。この菌が秋以降、台風風雨による傷などで増殖し、冬の発病につながるため、台風の通過前後に薬剤散布を実施し、菌密度を下げておく。

●チャノホコリダニ

- ・ 8月中旬～9月にかけて乾燥が続くと、秋芽にチャノホコリダニが多発することがある。秋冬番茶を摘採する茶園では、発生に注意し、早めに防除する。

【ねぎ】

＜生育の概況等＞

生育は平年並で推移している。

●疫病

予報の根拠

- ・ 8月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 0.04%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年よりも高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する（病原菌生育適温 28～30℃）。

防除対策

- ・ 多湿な環境で発生が多いため、例年発生が認められるほ場では、溝を切るなどしてほ場排水を良くする。
- ・ 窒素肥料の多用は本病を助長するため、施用量に気をつける。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・ 8月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 3.6%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年よりも高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 肥料切れや草勢の衰えは発病を助長するので、適切に施肥を行う。
- ・ 風ずれやネギアザミウマの食害は本病の発生を助長するため、防風ネットの設置やアザミウマの防除につとめる。
- ・ 薬剤防除は、予防散布または初期防除につとめる。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・ 8月下旬の巡回調査では、平均寄生株率 1.0%（平年 1.7%）と平年よりも少なかった。但し、一部の防除員からは発生が多い報告がある。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 例年 9月に発生が増加することから、ほ場をよく観察し、薬剤感受性が高い若齢幼虫のうちに防除する。
- ・ すでに発生が増加しているほ場では、早めに薬剤散布を行う。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・ 8月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は 0.3%（平年 32.0%）と平年よりも少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 近年、本虫の食害により葉が真っ白くなる被害が散見されている。多発すると生育が遅れるため、本種の発生に注意し早期に防除を行う。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 8月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均寄生株率 26.7%）。これは降雨直後の調査が要因として考えられ、磐田市の定点調査（無防除ほ場）では平均寄生株率 38%だった。また、防除員 2 名からの報告は、やや多の回答だった。
- ・ 1 か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 多発すると生育が遅れるため、発生が増加する前に防除を行う。すでに、発生が増加しているほ場では早めに防除を行う。
- ・ 本種はネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス（IYSV）を伝搬する。罹病株はタマネギやエシャレット等、他のネギ類への伝染源となるため、見つけ次第ほ場の外に持ち出し、土中に埋める等の処分をする。

【いちご】

<生育の概況等>

苗の生育はほぼ平年並に推移している。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 8月上旬の育苗ほ巡回調査では、平均発病株率は 0.5%（平年 1.8%）と平年より少なかった。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病の生育適温は 25℃前後であり、高温・多湿条件下で多発生しやすい。
- ・ 発病株からその周囲へと伝染しやすいため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。発病株はビニール袋に入れ圃場外へ出し、殺菌処理をしてから残渣を処分する。
- ・ 本病原菌は水滴の飛散によって伝染するため、株元灌水など水の跳ね返りを防ぐ形で灌水を行う。また、薬剤散布も同様の伝染条件を作り出す可能性があるため、殺虫剤のみの散布は注意して行うこと。
- ・ 発病株や罹病が疑われる株は、定植苗には使用せず、本ほへ持ち込まないこと。
- ・ 発病後は薬剤による治癒が困難であるため、定期的な防除による予防を心がける。激しい雨や台風など水滴が飛散しやすい状況の前後、親株からの切り離しなど株を傷つけるような作業後は重点的に防除を行う。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行うこと。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 8月上旬の育苗ほ巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年1.4%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は20℃前後であるため高温期の発病は抑制される。そのため本病の発生が停滞、終息したように見えるが、9月以降の気温の低下とともに再び発生が増加するため注意する。
- ・ 6、7月に発生がみられたほ場では薬剤散布による予防を継続し、罹病葉の除去を行う。病原を本ほに持ち込まぬよう、無病苗の定植に努める。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 8月上旬の育苗ほの巡回調査では、平均寄生株率は5.3%（平年8.0%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 育苗期の防除を徹底し、ハダニ類を本ほへ持ち込まないように注意する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 8月上旬の育苗ほの巡回調査では、平均寄生株率は0.2%（平年0.1%）と平年よりやや多かった。
- ・ 県内3か所のフェロモントラップにおける8月上中旬の誘殺数は、平年並～やや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 初期発生に注意し、若齢のうちに防除を行う。施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。

<その他の病害虫>

●コガネムシ類

- ・ 県内3か所の予察灯における8月上中旬の誘殺数は、平年並～多く推移している。
- ・ 例年発生がみられるほ場では、薬剤防除を実施する。
- ・ 定植時には根への幼虫の寄生に注意し、本ほへ幼虫を持ち込まないように注意する。

【作物全般】

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ フェロモントラップの誘殺数は浜松市西区協和町では平年より多いが、西区伊左地町では少なく、磐田市富丘では平年並に推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は高いため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ 芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3 季節予報

● 1か月予報（東海地方 令和5年8月24日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 8月26日から9月25日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう1か月	天候	平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率80%です。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率70%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率80%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率60%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	10	80
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	10	20	70
2週目	気温	10	10	80
3～4週目	気温	10	30	60

【予報の対象期間】

1か月	:	8月26日(土)～	9月25日(月)
1週目	:	8月26日(土)～	9月1日(金)
2週目	:	9月2日(土)～	9月8日(金)
3～4週目	:	9月9日(土)～	9月22日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--